

集団間の社会的比較に伴う感情の検討 : 学級間の比較に焦点を当てて

著者	長峯 聖人, 外山 美樹
著者別名	Nagamine Masato, Toyama Miki
雑誌名	筑波大学心理学研究
号	50
ページ	21-30
発行年	2015-08-25
その他のタイトル	The research of emotion accompanied with intergroup social comparison : Focus on comparison between classes
URL	http://hdl.handle.net/2241/00126963

集団間の社会的比較に伴う感情の検討

—学級間の比較に焦点を当てて—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 長峯 聖人

筑波大学人間系 外山 美樹

The research of emotion accompanied with intergroup social comparison: Focus on comparison between classes

Masato Nagamine (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Miki Toyama (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study was to examine emotion accompanied with intergroup social comparison exploratory. In this study, comparison between classes was taken up as one of intergroup social comparison. 354 junior high school students participated in our study. Factor analysis indicated that the scale of intergroup social comparison emotion involved five factors: "schadenfreude", "efficacy", "humility-contempt", "respect-praise", and "conation". *T*-test showed that the difference was not seen between men and women in all subscales. Hierarchical multiple regression analysis indicated that group identification was related to "efficacy", "respect-praise", and "conation" in men and women. Additionally, self-esteem was related to "efficacy" in men, social comparison orientation was related to "humility-contempt" and group identification was related to "schadenfreude" in women. These result suggest that group identification is an important factor in emotion accompanied with intergroup social comparison.

Key words: social comparison, intergroup relationship, social identity, emotion

社会的比較 (social comparison) とは自他を比較することの総称であり、Festinger (1954) によって体系化された概念である。Festinger (1954) によれば、人には自己の意見や能力を評価したいという動因が存在し、それらを評価する物理的な指標がない場合、他者との比較によって評価を行うとされる。

この社会的比較理論が提唱されてから、社会的比較に関する研究は数多く行われてきた。その中で、Gibbons & Buunk (1999) は社会的比較に従事する程度を個人の特性として扱い、それを社会的比較志向性 (social comparison orientation) と名づけた。社会的比較志向性は、実際の社会的比較行動を予測するという結果が示されている (Gibbons & Buunk, 1999)。

社会的比較に関する研究は個人間の比較に焦点を当てたものが主であるが、比較のプロセスに、比較の主体である個人が所属する集団を組み込んだ研究も存在する。

例えば、Gardner, Gabriel, & Hochschild (2002) は自身が所属する集団のメンバーたちと自らを同化し、1つの大きなカテゴリーとして認知するという自己拡張 (self-expansion) の概念を社会的比較の文脈に組み込んで検討した。Gardner et al. (2002) の実験では、集団内の情緒的繋がりが強調された文章を読んだ群 (自己拡張のプライミングあり群) は、個人の意思のみが強調された文章を読んだ群 (自己拡張のプライミングなし群) と比較して、自己関与度が高い領域において親しい友人を高く評価するという

結果が示された。個人間の比較において、比較の対象が自分に近い存在であった場合、比較している領域の自己関与度も高い場合には、対象に対する評価を低く見積もるということが明らかになっており (Tesser, Campbell, & Smith, 1984)。単なる個人間の比較と、集団という枠組みが関わる比較ではその結果に違いが見られることが考えられる。

社会的比較における自己拡張の研究は、集団という枠組みを社会的比較に組み込んでいないものの、比較の主体となっているのは自己であり、比較の対象は他者である。しかし、自己拡張が生じている場合には集団間を比較したことによるネガティブな結果が軽減されるという結果が示されており (磯部・浦, 2002)。自己拡張は自分の所属している集団と他の集団を比べるというような集団間の社会的比較にも影響を及ぼすと考えられる。

社会的比較という文脈は強調されていないものの、集団間の比較を扱ったものに社会的アイデンティティ研究がある。その中核となる社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) によれば、人は集団への所属性によって自己を定義し (社会的アイデンティティ)、それを肯定的に維持しようとする動機があるとされる。実際に、実験室で作られた恣意的な集団であっても、自分が所属する集団である内集団に対して、そうでない外集団より多くの利益を分配することが示されている (Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971)。このように、内集団に対して好意的あるいは協力的な行動や認知を示すことを内集団バイアスと呼ぶ (Tajfel & Turner, 1979)。この内集団バイアスは、自己概念と集団概念を同化する程度である集団同一視が高いと生じやすいことが明らかになっている (Karasawa, 1991)。集団同一視の概念は自己拡張と類似していると考えられ、これら社会的アイデンティティ研究の一連を、集団間における社会的比較と捉える立場も存在する (高田, 2011)。

上記のような社会的比較の研究は、主に実験室実験がほとんどであるが、少ないながらも日常場面における社会的比較に焦点を当てた研究も存在する。

例えば、高田 (1999) によると、年齢別に日常場面での社会的比較の頻度を検討した結果、青年期に最も高くなるという結果が得られている。しかし、それ以前の段階である幼児期や児童期においても社会的比較が生じているという知見もあり (外山, 2001)。社会的比較は決して青年期に特有なものではないと考えられる。他には、外山 (2009) が、中学生を対象にして、社会的比較志向性、社会的比較感情、社会的比較対処行動という3つの観点から社

会的比較を捉え、それらが学業成績に影響するプロセスを明らかにしている。

また、直接的に社会的比較を扱っていないものの、日常場面における社会的比較が個人に与える影響を検討した研究がいくつか存在する。例えば澤田・新井 (2002) は、小中学生を対象にして妬み傾向および妬み感情から妬みを感じた際の対処方略へ至る過程について検討を行い、妬み感情が生じた結果、妬みの対象に攻撃的な言動を行うプロセスを示した。また、高坂 (2009) も、中学生から大学生を対象にし、自己の容姿・容貌に対する劣性を認知したときに様々な感情が生じ、その結果特定の反応行動に至ることを明らかにした。

このように、日常場面における社会的比較は個人に多様な影響を与えると考えられる。しかし、社会的比較に関する研究のほとんどが個人間に焦点を当てたものであるように、日常場面における社会的比較も個人に主眼が置かれているものが多い。しかし、日常における社会的比較を検討する上で、個人間の比較だけでは不十分であると考えられる。自己拡張や社会的アイデンティティに関する研究で示されているように、集団間の社会的比較がもたらす影響は小さいものではない。それは、日常場面においても同様であると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、日常場面における集団間の社会的比較が個人にもたらす影響を探索的に検討することを目的とする。研究の実施にあたり、感情が特に社会的比較に伴って個人に最も直接的な影響をもたらす (Smith, 2000)、集団に焦点化された社会的比較においても内集団および外集団に対して何らかの感情が生じる (Yzerbyt, Dumont, Mathieu, Gordjin, & Wigboldus, 2006) ことから、感情に焦点を当てて検討を行っていくこととする。しかし、集団間の社会的比較に伴ってどのような感情が生じるのかは、明確でない。そこで、集団間の社会的比較に伴って個人が抱く感情の項目を収集し、それを基に集団間社会的比較感情を測定する尺度を作成する。さらに、集団間の社会的比較そのものとの関連を見るため、集団間の社会的比較の予測要因と考えられる変数との関連を検討する。本研究の成果は、感情という観点から、日常場面における集団間の社会的比較が個人にもたらす影響を明らかにするための一助になると考えられる。

研究の対象者および対象集団の設定については、中学生を対象とし、学級を内集団に設定することとする。その理由としては、日常場面における集団を考慮する際に小・中学校での学級を対象としたものが多く (e.g., 淵上・今井・西山・鎌田, 2006; 本

郷, 2005; 大西・吉田, 2010), 特に中学生において級友適応が学校生活に強い影響を及ぼしている(吉岡, 2001)ことが挙げられる。また, 中学生は部活動に所属するなど集団的な状況が増加するため, それ以前の年代よりも集団をより意識しやすいと考えられる。

集団間の社会的比較を検討する際には, 日常場面において集団間の比較を行うような状況は容易に想像可能なものではないと考えられるため, 仮想場面を用いることとする。特に, 集団間の対比をより強調するために競争場面を用いることとする。

集団間の社会的比較を予測する変数としては, 社会的比較志向性, 集団同一視, 自尊感情を取り上げる。Gibbons & Buunk (1999)で示されたように, 社会的比較志向性は社会的比較行動を予測する指標として適切であると考えられ, 外山(2009)においても社会的比較志向性と社会的比較感情の間に正の相関が見られている。それらは個人間の比較に関する研究ではあるが, 同じ社会的比較である以上, 社会的比較志向性は集団間の比較行動も予測すると考えられる。また, Karasawa (1991)において, 集団同一視は内集団バイアスと正の関連があることが示されている。内集団バイアスは集団間の社会的比較の一形態であると考えられるため, 集団同一視が高いと, 集団間の社会的比較によって伴う感情も生じやすいと考えられる。自尊感情は, 社会的比較の根本原理に自尊感情を高く維持しようとする動機がある(高田, 2011)ことから, 社会的比較について検討する上では不可欠な変数であると考えられる。

予備調査

目的

予備調査では, 本調査で使用する仮想場面が, 中学生が回答する上で適切であるかどうかの検証を行うとともに, 集団間社会的比較感情尺度を作成するための項目を収集することを目的とした。

方法

調査対象者 中学1～3年生15名(男子10名, 女子5名)を調査対象とした。

調査時期 2014年7月。

手続き 部活動の空き時間を利用し, 半構造化面接を行った。調査を行う前に面接の内容について概要を説明し, その上で面接の実施ならびに面接内容の録音に関して承諾を得てから面接を開始した。

調査内容 集団間社会的比較感情を検討するにあたり, 調査対象者に対して倫理的に配慮する必要があるという観点から, 文章とイラストから構成され

る仮想場面を提示し, その登場人物に生じていると考えられる感情を回答させる形を取ることにした。仮想場面は, 事前の調査¹⁾で内容的妥当性を確認したものをを用いた。場面は登場人物²⁾の学級と他の学級³⁾がクラスマッチ(競技はバスケットボール)で対戦しており, 試合の状況は五分であるというものであった。場面は面接者が文章を声に出して読み上げる形を取り, すべて読み終わった後で, 「あなたがA君(さん)だとしたら, どんなことを感じたりすると思いますか?」と尋ね, できるだけ多く回答するように求めた。その後, 場面の想像しやすさならびに登場人物に対する投影の程度について, “そう思う”, “どちらかといえばそう思う”, “どちらともいえない”, “どちらかといえばそう思わない”, “そう思わない”の5件法で尋ねた。場面の想像しやすさについては, 「場面は, 実際の学校生活と合わせて考えてみて, 想像しやすかったですか?」と尋ねた。登場人物に対する投影の程度については, 「あなたは質問に答えるとき, A君(さん)の気持ちになって答えましたか?」と尋ねた。最後に, 調査対象者において調査に対する疑問や質問がないことを確認した上で, 面接を終了した。

結果

場面の想像しやすさならびに登場人物に対する投影の程度について, 回答が“どちらともいえない”であるダミー変数を用意し, Wilcoxonの順位付符号検定を行った。分析の結果, いずれにおいてもダミー変数より有意に得点が高いことが示され, 作成した仮想場面が, 中学生が回答する上で妥当であることが確認された。さらに, 面接調査により得られた, 登場人物が感じている内容の項目についてKJ法を援用して整理したところ, 181項目が得られた。それらの項目を分類するカテゴリーについて何度か検討を行った結果, 最終的に5つのカテゴリーに分類することが最適であると判断した。第1カテゴリーは“意欲”(項目例:相手に勝ちたい), 第2カテゴリーは“有能感”(項目例:自分たちのほうが良い), 第3カテゴリーは“卑下・軽視”(項目例:

- 1) 心理学を専攻する大学院生15名を対象とし, 作成した仮想場面の内容的妥当性を質問紙調査によって検証した。手続きとして, 文章とイラストによる仮想場面を提示し, それぞれに対して, 集団間の社会的比較が適切に表現されていると思うかを“そう思う”から“そう思わない”の5件法で尋ねた。
- 2) 場面中ではA君(さん)として表記した。調査対象者が投影する対象として設定され, 調査対象者の性別と一致するように配慮した。
- 3) 場面中ではx組と表記した。

(相手のクラスは) たいしたことがない), 第4カテゴリーは“シャーデンフロイデ”(項目例:(相手のクラスに対して) ミスをしてしまえ), 第5カテゴリーは“敬意・称賛”(項目例: 向こうのチームにもがんばってほしい) であった。

これらのカテゴリーごとに6項目ずつ作成し, 全30項目を集団間社会的比較感情尺度とした。

本調査

目的

本調査では, 予備調査で作成した集団間社会的比較感情尺度を用いて, 集団間社会的比較感情が, 集団間の社会的比較と関連があると考えられる社会的比較志向性, 集団同一視, 自尊感情によって説明されるかを検討することを目的とした。

方法

調査対象者 茨城県内にある中学校2校の中学1・2年生169名(男子84名, 女子84名, 性別不明1名)と静岡県内にある中学校1校の中学1・2年生185名(男子99名, 女子83名, 性別不明3名)の計354名(男子183名, 女子167名, 性別不明4名)を調査対象者とした。

調査時期 2014年10月~2014年11月。

手続き ホームルームや授業時間の一部を利用して, 学級ごとに質問紙調査用紙を配布する形で実施した。

倫理的配慮 質問紙調査を実施する際, 実施の前に, 回答内容と学校での成績には一切関係がないこと, 回答内容が他の人に知られる心配はないこと, 答えたくない質問を飛ばしたり, 途中で回答をやめたりしても構わないことを質問紙の表紙に明記した上で, 調査を実施する教師にその旨を口頭で説明するよう依頼した。また, 本研究は著者らが所属している大学に開設されている倫理審査委員会で承認を受けてから行われた。

調査内容 まず, 予備調査で使用した場面から登場人物の内面や言動の描写を削除したものを提示し, 集団間の社会的比較が行われる状況において生じる感情に関する項目に回答するよう求めた。項目は, 予備調査で作成した集団間社会的比較感情尺度全30項目を用いた。すべての項目について, “そう思う”, “ややそう思う”, “どちらともいえない”, “あまりそう思わない”, “そう思わない”の5件法で回答を求めた。その後, “自分にとってスポーツ/バスケットボールは重要である”という2つの項目にどの程度当てはまるかを, “非常にそう思う”, “そう思う”, “どちらともいえない”, “そう思わない”,

“全くそう思わない”の5件法で回答するよう求めた。その後, 関連変数としての尺度について回答を求めた。使用した尺度は以下の通りである。

(a) 社会的比較志向性尺度: 外山(2002)の尺度のうち, 能力比較下位尺度7項目について5件法で尋ねた(項目例: 自分の親しい人の状況と, 他の人の状況をよく比べる)。

(b) 集団同一視尺度: Karasawa(1991)の尺度を, 中学生が理解できるように項目の表記を一部改めて使用した。また, 元の尺度はSD法であるが, 本研究においては中学生が回答しやすいよう, リッカート法に変更した。短縮版全7項目について, “非常にあてはまる”, “ややあてはまる”, “どちらともいえない”, “あまりあてはまらない”, “全くあてはまらない”の5件法で回答を求めた(項目例: ●組に親しみを感じている⁴⁾)。

(c) 自尊感情尺度: 桜井(2000)の尺度全10項目について, 4件法で回答を求めた(項目例: 私は自分に満足している)。

結果

集団間社会的比較感情尺度の因子構造 集団間社会的比較感情尺度全30項目に対して最尤法による因子分析を行った⁵⁾。その結果, スクリーン基準ならびに因子の解釈可能性から, 5因子解が妥当であると判断した。そこで, 5因子を仮定して最尤法, Promax回転による因子分析を行った。分析の結果, 同じ下位尺度として想定した他の項目と異なったパターンを示した項目が2つ見られた。項目内容を検討した結果, それらと, 同じ因子に負荷量が高い他の項目を合わせて1つの尺度としてみなすことは内容的に妥当でないと判断し, 2項目とも削除した。また, いずれの因子においても.40以上の負荷量を示さなかった1項目も削除した。残った27項目について再度, 最尤法, Promax回転による因子分析を行ったところ, すべての項目がいずれか1つの因子にのみ.40以上の負荷量を示していたため, 分析を

4) 教示文において, “●組”に自分の学級をあてはめて回答するよう求めた。

5) 集団間社会的比較感情尺度の偏向状況を確認した結果, “意欲”として作成した6項目すべてと“敬意・称賛”として作成した6項目のうち4項目において, 肯定的回答(評定値が4, 5)に全回答の70%以上が分布し, 否定的回答(評定値が1, 2)に全回答の10%以下しか分布しておらず, 回答が偏向していると考えられた。しかし, 項目の内容を加味した結果, いずれの項目も肯定的回答に分布が偏るのは自然なことであると推察された。したがって, これらの項目は削除せず, 今後の分析においても使用することとした。

Table 1
集団間社会的比較感情尺度の因子分析結果

	項目	M	SD	F1	F2	F3	F4	F5	h^2
第1因子	シャーデンフロイデ ($\alpha = .94$)								
4	x組が負けると楽しくなる	2.46	1.29	.93	.02	-.05	-.03	-.01	.83
5	x組が負けるとうれしい	2.45	1.32	.92	.03	-.01	.08	-.02	.78
3	x組がミスをするとうれしい	2.80	1.33	.88	.04	-.10	-.01	.08	.68
6	x組がミスをするといいい気味だと思う	2.28	1.26	.79	-.07	.13	.02	-.02	.78
2	x組がミスをする楽しくなる	2.57	1.31	.78	-.05	.05	-.07	.08	.72
1	x組が負けるといい気味だと思う	2.39	1.25	.61	-.02	.19	.06	-.03	.53
第2因子	有能感 ($\alpha = .87$)								
5	自分のクラスはチームワークがよい	3.87	1.00	.01	.88	-.05	.01	-.09	.69
6	自分のクラスは強い	3.71	1.04	.01	.83	.03	-.01	-.02	.67
3	自分のクラスは団結力がある	3.85	1.08	-.09	.75	-.11	-.07	.03	.59
4	自分のクラスは勢いがある	3.86	0.99	.05	.72	.03	.14	.00	.61
2	自分のクラスの方がずっとうまい	3.18	1.04	.05	.60	.19	-.03	.02	.41
1	自分のクラスは勝てる	3.91	1.04	-.03	.55	.05	-.12	.24	.46
第3因子	卑下・軽視 ($\alpha = .90$)								
5	x組なんか相手にならない	1.84	1.04	.00	-.03	1.00	.08	.01	.92
6	x組はたいしたことがない	1.87	1.03	.00	-.02	.97	.06	.02	.87
1	x組はそこまでうまくない	2.35	1.01	.08	.10	.55	.02	-.10	.38
3	x組は動きがよくない	2.30	1.04	.06	.03	.54	-.13	-.01	.45
4	x組にはよいところがない	1.93	1.06	.08	-.04	.54	-.22	.03	.55
2	x組は弱い	2.18	1.08	.19	.12	.46	-.11	-.07	.47
第4因子	敬意・称賛 ($\alpha = .82$)								
5	x組も頑張っている	4.27	0.95	.11	-.04	-.11	.81	-.03	.64
6	x組とお互いに頑張れたらいい	4.19	1.09	-.02	-.09	.04	.80	-.03	.56
2	x組にもよいところがある	4.19	0.95	.07	.08	-.06	.67	-.06	.47
3	x組もよいチームだ	4.12	0.95	-.09	.12	-.05	.61	-.01	.53
1	x組とよい試合がしたい	4.10	1.18	-.08	-.06	.14	.58	.21	.41
第5因子	意欲 ($\alpha = .86$)								
2	x組に負けたくない	4.42	0.99	.07	.05	-.03	-.09	.86	.75
6	x組に勝ちたい	4.52	0.86	.06	.10	-.09	-.02	.76	.70
4	自分のクラスのことを応援したい	4.55	0.80	-.06	.16	.04	.16	.59	.62
1	練習の成果を出したい	4.44	0.92	-.04	.13	.01	.13	.54	.49
因子間相関				F2	-.02				
				F3	.67	-.05			
				F4	-.44	.35	-.57		
				F5	-.05	.63	-.21	.46	

(注) x組は、場面における他の学級を指す。

終了した。最終的な因子パターンと項目平均ならびに標準偏差を Table 1 に示す。第1因子は“x組が負けると楽しくなる”、“x組が負けるとうれしい”などの項目が高い負荷量を示していたため、“シャーデンフロイデ”と命名した。第2因子は“自分のクラスはチームワークがよい”、“自分のクラスは強い”などの項目が高い負荷量を示していたため、“有能感”と命名した。第3因子は“x組なんか相手にならない”、“x組はたいしたことがない”などの項目が高い負荷量を示していたため、“卑

下・軽視”と命名した。第4因子は“x組も頑張っている”、“x組とお互いに頑張れたらいい”などの項目が高い負荷量を示していたため、“敬意・称賛”と命名した。第5因子は“x組に負けたくない”、“x組に勝ちたい”などの項目が高い負荷量を示していたため、“意欲”と命名した。

因子分析の結果に基づき、各因子に高い負荷量を示した項目 (Table 1 の太字で示した項目) で下位尺度を構成した。さらに、各下位尺度の内的一貫性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したと

Table 2
 集団間社会的比較感情および関連変数の記述統計量と相関係数

項目数	得点 範囲	M	SD	相関係数							
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
シャーデンフロイデ	6	6~30	14.94	6.76	.02	.66***	-.40***	-.06	.14**	.01	-.06
有能感①	6	6~30	22.36	4.84		-.03	.26***	.62***	.15**	.47***	.30***
卑下・軽視②	6	6~30	12.38	5.06			-.51***	-.22***	.10	-.15**	-.13*
敬意・称賛③	5	5~25	20.86	3.91				.44***	.08	.34***	.11
意欲④	4	4~20	17.89	3.00					.17**	.44***	.21***
社会的比較志向性⑤	7	7~35	22.34	5.15						.20***	-.03
集団同一視⑥	7	7~35	22.98	5.07							.29***
自尊感情⑦	9	9~36	22.92	5.38							

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

ころ、“シャーデンフロイデ”で.94、“有能感”で.87、“卑下・軽視”で.90、“敬意・称賛”で.82、“意欲”で.86と十分な値が確認された。各下位尺度と関連変数の平均および標準偏差を Table 2 に示した。

集団間社会的比較感情における性差 集団間社会的比較感情尺度において、男女で差が見られるのかどうか検討するため、 t 検定を行った。結果を Table 3 に示す。“シャーデンフロイデ”、“有能感”、“卑下・軽視”、“敬意・称賛”、“意欲”のすべてにおいて男女で有意な差が見られなかった（順に、 $t(339) = 0.69$, $n.s.$, $d = 0.08$; $t(340) = 1.67$, $n.s.$, $d = 0.18$; $t(335) = 1.42$, $n.s.$, $d = 0.15$; $t(340) = 0.23$, $n.s.$, $d = 0.02$; $t(338) = 1.54$, $n.s.$, $d = 0.17$)。

集団間社会的比較感情を予測する要因の検討 社会的比較志向性、集団同一視、自尊感情⁶⁾が、集団間社会的比較感情に対して影響を及ぼすのか検討するために、集団間社会的比較感情の各下位尺度を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。まず、第1ステップでバスケットボールの重要性を統制変数として投入した⁷⁾。続いて、第2ステップで社会的比較志向性、集団同一視、自尊感情を回帰式に投入した。分析にあたって、男女によって結果に違いが見られる可能性を踏まえ、男女別に検討を行った。

6) 自尊感情尺度は全10項目であったが、項目8“もう少し自分を尊敬できたらと思う。”が自尊感情尺度全体の α 係数を著しく低下させていたためこれを削除し、残りの9項目を自尊感情として扱った。

7) 本研究で用いた場面がバスケットボールを題材にしたものであり、バスケットボールの重要性を統制する必要があると考えたためである。同様にスポーツの重要性についても尋ねたが、肯定的回答(4, 5)に70%以上分布している一方で否定的回答(1, 2)に10%以下しか分布しておらず、回答が偏向していると考えられたため統制変数からは除外した。

Table 3
 集団間社会的比較感情の性差

	集団	n	M	SD	t 値
シャーデンフロイデ	男	176	15.23	6.91	0.69
	女	165	14.73	6.56	
有能感	男	180	21.93	4.87	1.67
	女	162	22.81	4.83	
卑下・軽視	男	175	12.79	5.31	1.42
	女	162	12.01	4.76	
敬意・称賛	男	179	20.79	3.94	0.23
	女	163	20.88	3.91	
意欲	男	178	17.65	2.96	1.54
	女	162	18.15	3.06	

まず、“シャーデンフロイデ”を従属変数として分析を行った。男子は、いずれのステップも有意ではなかった。女子は、第2ステップのみ有意であり($\Delta R^2 = .07$, $F(3, 141) = 3.59$, $p < .05$)、集団同一視の標準偏回帰係数が有意であった($\beta = .27$, $p < .01$)。

次に、“有能感”を従属変数として分析を行った。男子は、第2ステップのみ有意であり($\Delta R^2 = .28$, $F(3, 134) = 20.02$, $p < .001$)、集団同一視と自尊感情の標準偏回帰係数が有意であった(順に、 $\beta = .32$, $p < .01$; $\beta = .27$, $p < .001$)。女子は、第1、第2ステップが有意であった(順に、 $R^2 = .11$, $F(1, 144) = 18.74$, $p < .001$; $\Delta R^2 = .20$, $F(3, 141) = 8.71$, $p < .001$)。第1ステップではバスケットボールの重要性の標準偏回帰係数が有意であり($\beta = .33$, $p < .001$)、第2ステップでは、集団同一視の標準偏回帰係数が有意であった($\beta = .44$, $p < .001$)。

次に、“卑下・軽視”を従属変数として分析を行った。男子は、いずれのステップも有意ではなかった。

女子は、第1、第2ステップが有意であった（順に、 $R^2 = .04$, $F(1, 144) = 5.81$, $p < .05$; $\Delta R^2 = .05$, $F(3, 141) = 2.96$, $p < .05$ ）。第1ステップではバスケットボールの重要性の標準偏回帰係数が有意であり（ $\beta = -.20$, $p < .05$ ）。第2ステップでは、社会的比較志向性の標準偏回帰係数が有意であった（ $\beta = .17$, $p < .05$ ）。

次に、“敬意・称賛”を従属変数として分析を行った。男子は、第2ステップのみ有意であり（ $\Delta R^2 = .16$, $F(3, 134) = 7.37$, $p < .001$ ）。集団同一視の標準偏回帰係数が有意であった（ $\beta = .34$, $p < .01$ ）。女子は、第1、第2ステップが有意であった（順に、 $R^2 = .10$, $F(1, 144) = 15.26$, $p < .001$; $\Delta R^2 = .07$, $F(3, 141) = 3.02$, $p < .05$ ）。第1ステップではバスケットボールの重要性の標準偏回帰係数が有意であり（ $\beta = .32$, $p < .001$ ）。第2ステップでは、集団同一視の標準偏回帰係数が有意であった（ $\beta = .27$, $p < .01$ ）。

最後に、“意欲”を従属変数として分析を行った。男子は第1、第2ステップが有意であり（順に、 $R^2 = .06$, $F(1, 137) = 7.16$, $p < .01$; $\Delta R^2 = .19$, $F(3, 134) = 9.99$, $p < .001$ ）。女子も第1、第2ステップが有意であった（順に、 $R^2 = .09$, $F(1, 144) = 13.60$, $p < .001$; $\Delta R^2 = .16$, $F(3, 141) = 6.38$, $p < .001$ ）。第1ステップでは男子、女子ともにバスケットボールの重要性の標準偏回帰係数が有意であり（順に、 $\beta = .24$, $p < .01$; $\beta = .29$, $p < .001$ ）。第2ステップでは、男子、女子ともに集団同一視の標準偏回帰係数が有意であった（順に、 $\beta = .37$, $p < .001$; $\beta = .41$, $p < .001$ ）。

考察

本研究の目的は、集団間社会的比較感情尺度を作成し、集団間社会的比較感情が社会的比較志向性、集団同一視、自尊感情によって予測されるかを検討することであった。

集団間社会的比較感情の構造 集団間社会的比較感情尺度について因子分析を行った結果、5つの因子が抽出された。一部の項目が削除されたものの、これは予備調査の段階で想定していた下位カテゴリーの構造と一致しており、因子的妥当性が得られたと言える。また、各因子に負荷量が高かった項目で下位尺度を設定したところ、十分に高い内の一貫性が確認された。

本研究において確認された5つの下位尺度は、“シャーデンフロイデ”、“有能感”、“卑下・軽視”、“敬意・称賛”、“意欲”であった。これらの感情は、Smith (2000) における、社会的比較に伴う感情の分類に対応していると考えられる。“シャーデンフ

ロイデ”は“schadenfreude”と、“有能感”は“pride”と、“卑下・軽視”は“contempt”と、“敬意・称賛”は“admiration”と、“意欲”は“inspiration”と類似した概念であると考えられる。このことから、個人間の社会的比較によって生じる感情と集団間の社会的比較によって生じる感情とでは共通する点があることが示唆された。しかし、本研究ではSmith (2000) の分類に存在する他の感情に該当する項目を収集できておらず、異なる点も存在すると考えられる。また、Smith (2000) では、社会的比較に伴って生じる感情は分類したものに限りなく指摘されていることから、集団間の社会的比較に伴う感情については更なる検討が必要である。

集団間社会的比較感情における性差 性差の検討を行った結果、いずれの下位尺度間においても男女で有意な差が見られなかった。

下位尺度のうち“敬意・称賛”と“意欲”については回答に偏向が見られ、おおそ肯定的回答に分布が偏っていた。このことから、男女問わず“敬意・称賛”と“意欲”は生じやすい感情であることが考えられる。回答に偏向が見られているのは男女とも共通しており、ほとんどの中学生にとって強く生じやすい感情であると言える。したがって、これら2つの下位尺度は性差だけでなく個人差も反映されないものとなっている。尺度として、個人差が反映されない項目は不適であると考えられる。今後は“敬意・称賛”ならびに“意欲”の扱いについて、慎重になる必要があるだろう。

“有能感”については、中学生における自己効力感に性差が存在しないという知見があり（五十嵐・平岩・吉野, 2012）、結果が一致している。このことは、効力感や有能感の認知については、個人として感じるものと集団として感じるものと違いが見られないことを示唆している。自己拡張や社会的アイデンティティの研究から考えられるように、自己と内集団は密接に結びついているため、その感情が自己へ向けられているか内集団に向けられているかで結果が変わらないのだろうと推察される。

一方、“シャーデンフロイデ”や“卑下・軽視”は個人間においては性差が存在しているという知見がある。例えば、澤田 (2008) では男性が女性よりもシャーデンフロイデの程度が強いことが示されており、速水 (2011) では男性が女性よりも他者軽視の程度が強いことが示されている。このことは、“シャーデンフロイデ”と“卑下・軽視”で測定している概念は個人間と集団間で異なる可能性を示している。これら2つの下位尺度は外集団（本研究においては他の学級）に向けられたものであるが、集

団間を比較するような状況においては外集団の力を削いで内集団を優位にすることが適応的であるとされる(横田・結城, 2009)。この様相は、比較が必ずしも自己と特定の他者との2者間で行われられないような個人間の比較状況とは異なるものである。したがって、比較対象にネガティブな感情を示す“シャーデンフロイデ”や“卑下・軽視”の概念は個人間と集団間で違いが見られたのだと考えられる。集団間において性差が見られなかった理由として、自己概念について男性は内集団による影響が大きく、女性は他者との関係性による影響が大きいとされており(Gardner et al., 2002)。学級集団においては両者の要因が混合しているために男女とも学級と自己を密接なものとして認知していた可能性が考えられる。

集団間社会的比較感情を予測する要因の検討 本研究の結果から、集団間社会的比較感情を予測する要因として、それぞれわずかに結果は異なるものの、おおよそ集団同一視が予測変数となることが示された。

集団同一視の標準偏回帰係数が有意だったのは、男子では、“有能感”、“敬意・称賛”、“意欲”であった。女子では、“シャーデンフロイデ”、“有能感”、“敬意・称賛”、“意欲”であった。このことから、性別にかかわらず、集団同一視は特に集団間の社会的比較に伴うポジティブな感情を予測する変数であることが示された。

集団同一視は内集団バイアスと関連があり(Karasawa, 1991)。内集団バイアスは社会的アイデンティティを肯定的に維持しようとする動機から生じるとされるため、“有能感”や“意欲”を予測する変数であるということは自然な結果であると考えられる。外集団に対するポジティブな感情である“敬意・称賛”においても集団同一視が予測変数となっていたのは、学級という集団が持つ特殊性による可能性がある。内外集団で共通のカテゴリーが存在するか、内外集団の成員同士で接触がある場合に、再カテゴリー化が行われることで同じ集団の成員として認知される(池上, 2014)。学級では学校という共通のカテゴリーがあり、体育や休み時間などで他の学級の生徒と関わる機会も多いと考えられるため、外集団に対しても同一視が生じ、結果としてポジティブな感情を予測する要因となったのかも示れない。

“シャーデンフロイデ”は、女子でのみ集団同一視が予測変数となっていた。シャーデンフロイデは個人間においては男子のほうが、女子より程度が強いとされる(澤田, 2008)。しかし、集団同一視が

強いと女子でも“シャーデンフロイデ”が生じる程度が強いということが示された。シャーデンフロイデは他者の不幸を望み、それを喜ぶという概念であり(澤田, 2008)、女子では個人としてよりも集団の成員としての自己を強く認知しているほうが、比較対象に対するネガティブな感情を抱きやすい可能性が考えられる。

集団同一視以外では、男子の“有能感”において自尊感情が、女子の“卑下・軽視”において社会的比較志向性が、有意な予測変数となっていた。しかし、その他の感情においては結果が出なかった。これらのことを踏まえると、集団間の社会的比較に関しては個人間の比較で重要とされている社会的比較志向性や自尊感情よりも、自己と内集団を同一化する程度である集団同一視が重要な役割を担うことが示唆されたと言える。このことは、個人間の社会的比較と集団間の社会的比較では異なるプロセスが生じている可能性を示しており、その異同を検討する上で意義深い結果を提示できたものと考えられる。

本研究における課題とまとめ 本研究において重要な課題が3つある。まず1つは、集団間の社会的比較状況の設定である。本研究では、自分の学級が他の学級とクラスマッチで対戦しているという場面を設定した。教示においては力量にほとんど差がないとしており、これは同等比較であると言える。しかし、社会的比較は自分より優位なものと比較する上方比較や劣位なものと比較する下方比較も存在する。今回の結果が、同等比較でのみ示されるものなのか、あるいは上方比較や下方比較でも同様に示されるものであるのか、更なる検討の必要がある。また、場面がクラスマッチというスポーツ、あるいは競争という要素が絡んだものであり、学級集団としてのすべての集団間比較に適用できるものではない。本研究で用いた場面とは異なる集団間比較場面でも同様の結果が得られるのか、検討の必要がある。

2つ目は、対象を中学生に限定していることである。年代によっては、学級集団の持つ役割も変わり、学級間の比較という文脈が異なった意味合いを持つようになると考えられる。したがって、今回の結果を学級集団全体に般化することはできない。他の年代においても検討を行い、学級集団を比較することでどのような影響があるのか、その違いを見ていく必要がある。

3つ目は、集団間社会的比較感情尺度の内容である。上記でも触れたように、下位尺度である“敬意・称賛”と“意欲”において肯定的回答に分布が偏っていた。たしかにこれらの感情は集団間の社会

的比較によって生じるものなのかもしれないが、個人差を反映できない尺度は非常に問題であり、本研究における限界点であると言える。今後は、項目の内容を再考するなど、これらの下位尺度を検討するに当たって工夫を要するべきであろう。

以上のような課題は残されているものの、本研究は学級集団間の社会的比較に伴う感情を探索的に検討し、その予測要因を明らかにすることができた。このことは、集団間の社会的比較がもたらす影響を検討し、社会的比較が持つ機能を明らかにするための有益な結果を示すことができたものと考えられる。

引用文献

- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison process. *Human Relations*, *7*, 117-140.
- 淵上克義・今井奈緒・西山久子・鎌田雅史 (2006). 集団効力感に関する理論的・実証的研究—文献展望、学級集団効力感、教師集団効力感作成の試み— 岡山大学教育学部研究集録, *131*, 141-153.
- Gardner, W. L., Gabriel, S., & Hochschild, L. (2002). When you and I are “we”, you are not threatening: The role of self-expansion in social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, *82*, 239-251.
- Gibbons, F. X., & Buunk, B. P. (1999). Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *76*, 129-142.
- 速水敏彦 (2011). 仮想的有能感研究の展望 教育心理学年報, *50*, 176-186.
- 本郷由紀子 (2005). 中学生における学級の集団効力感尺度の作成と自己効力感および学校適応感の関連について 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, *8*, 63-72.
- 五十嵐哲也・平岩あゆみ・吉野成美 (2012). 中学生における学校生活スキルの各領域と自己効力感との関連 愛知教育大学保険環境センター紀要, *11*, 11-16.
- 池上知子 (2014). 差別・偏見研究の変遷と新たな展開—悲観論から楽観論へ— 教育心理学年報, *53*, 133-146.
- 磯部智加衣・浦 光博 (2002). 内集団成員との上方比較後の感情・状態自尊心に、集団間上方比較と特性自尊心が及ぼす影響 実験社会心理学研究, *41*, 98-110.
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, *30*, 297-307.
- 高坂康雅 (2009). 青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連 教育心理学研究, *57*, 1-12.
- 大西綾子・吉田俊和 (2010). いじめの個人内生起メカニズム—集団規範の影響に着目して— 実験社会心理学研究, *49*, 111-121.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, *12*, 65-71.
- 澤田匡人 (2008). シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響—罪悪感、自尊感情、自己愛に着目して— 感情心理学研究, *16*, 36-48.
- 澤田匡人・新井邦二郎 (2002). 妬みの対処方略選択に及ぼす、妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性の影響 教育心理学研究, *50*, 246-256.
- Smith, R. H. (2000). Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparisons. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research*. New York: Kluwer Academic/Plenum publishers. pp.173-200.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, *1*, 149-178.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks-Core. pp.33-47.
- 高田利武 (1999). 日常事態における社会的比較と文化的自己観—横断資料による発達の検討— 実験社会心理学研究, *39*, 1-15.
- 高田利武 (2011). 新版：他者と比べる自分—社会的比較の心理学— サイエンス社
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. (1984). Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, *46*, 561-574.
- 外山美樹 (2001). 幼児・児童における社会的比較の発達の变化—認知、感情、行動の観点から—

- 教育心理学研究, **49**, 500-507.
- 外山美樹 (2002). 社会的比較志向性と心理的特性との関連—社会的比較志向性尺度を作成して—筑波大学心理学研究, **24**, 237-244.
- 外山美樹 (2009). 社会的比較が学業成績に影響を及ぼす因果プロセスの検討—感情と行動を媒介にして パーソナリティ研究, **17**, 168-181.
- 横田晋大・結城雅樹 (2009). 外集団脅威と集団内相互依存性—内集団ひいきの生起過程の多重性— 心理学研究, **80**, 246-251.
- 吉岡和子 (2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, **13**, 13-30.
- Yzerbyt, V., Dumont, M., Mathieu, B., Gordjin, E., & Wigboldus, D. (2006). Social comparison and group-based emotions. In S. Guimond (Ed), *Social Comparison and Social Psychology: Understanding cognition, intergroup relations and culture*. New York: Cambridge University Press. pp.174-205.

(受稿 3月31日 : 受理 5月11日)